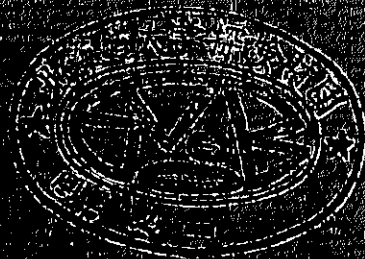


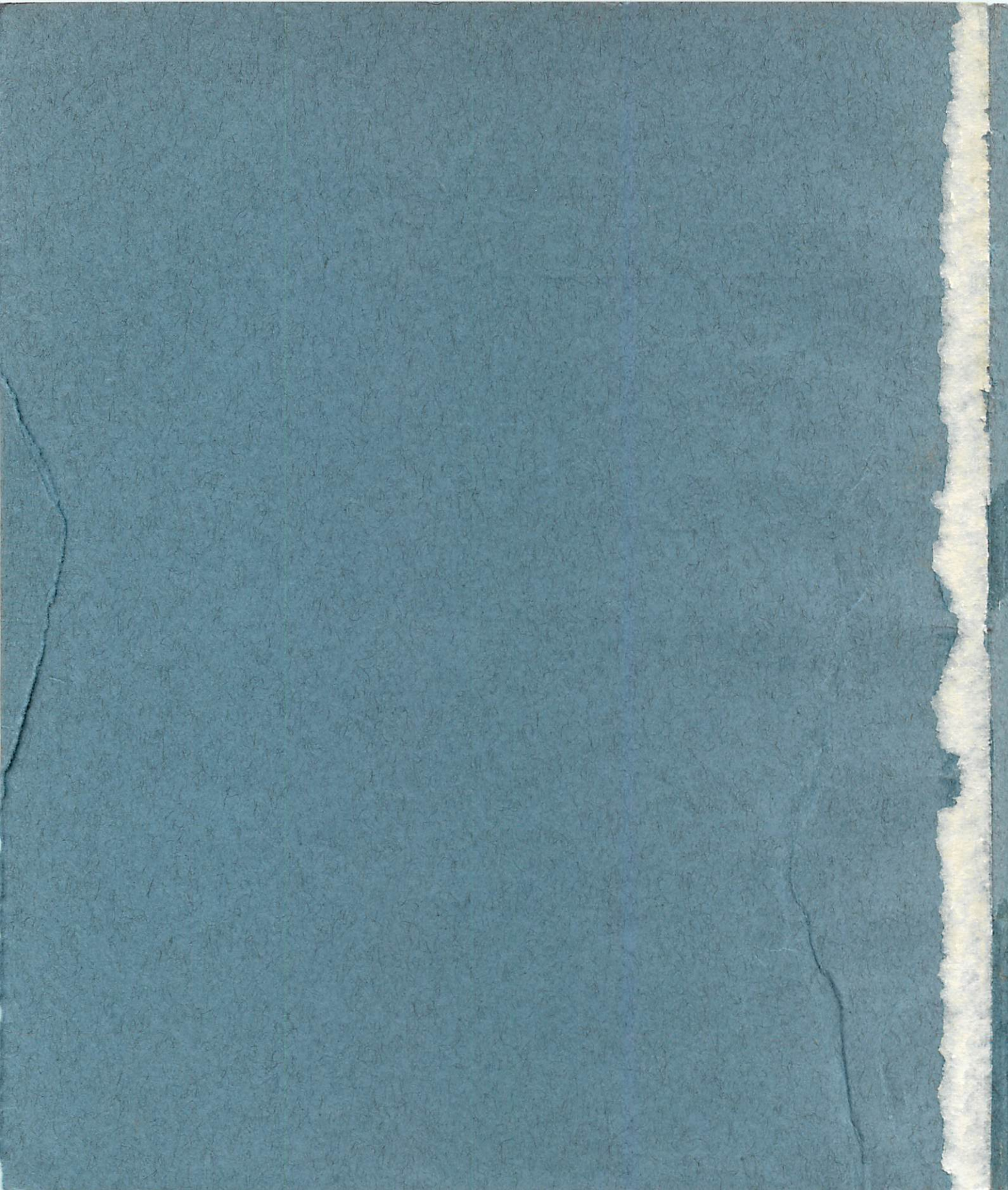
HIMALAYA  
EXPEDITION  
OF  
A.A.C.H.  
1963



HIMALAYA EXPEDITION OF A.A.C.H. 1963

1963





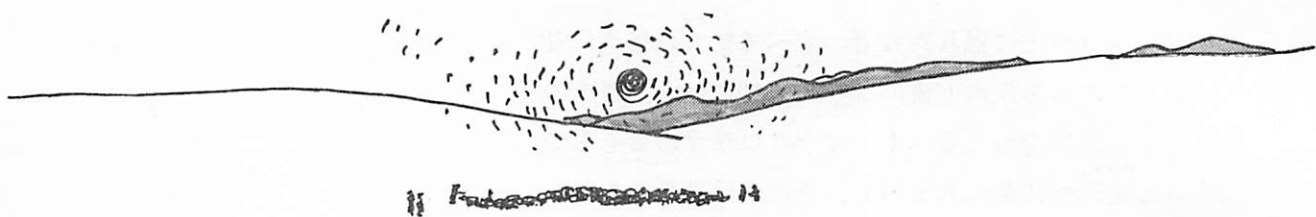
マナサロワラの地に触れたる者、すべて梵天<sup>ブラマ</sup>の極楽に赴くべく、その水を飲みし者、シバの天国に赴き、百千の罪の汚れも拭ひ清めらるべく、マナサロワラの名をもつ獣すらも梵天<sup>ブラマ</sup>の極楽に入るべし。その水は真珠の如し。この世にヒマチャラにまさる山なし。カイラスとマナサロワラとその中にあればなり。露の朝日に消ゆるが如く、人の罪もヒマチャラを見れば消ゆべし。

ジャング・ブラナの一節より



北海道大学西ネパール遠征隊報告

1963.7~1964.2



## 目 次

卷 頭 言 .....	1
紀 行	
チベット高原への旅 .....	2
遠征計画の発足について .....	19
ナラ・カンカール考 .....	20
一 談 論 一	
遠征をかえりみて .....	27
装備について .....	30
食糧について .....	40
ノート 現地食について .....	43
医療について .....	46

## 学術調査報告

カルナリ河流域の地質 ..... 50

タクブ氷河における二, 三の観察 ..... 56

遠征隊日誌 ..... 62

## Interlude

西ネパール探検小史 ..... 18

タクラコット日記 ..... 25

西ネパールの度量衡 ..... 48

気象について ..... 55

シェルパ諸氏 ..... 60

隊員の横顔 ..... 61

西ネパール遠征隊決算報告 ..... 66

西ネパール遠征隊に援助をいただいた法人及び個人 ..... 67

写真: 13葉

図版: 西ネパールカルナリ河流域概念図(折込)



安藤久男 (隊長 30歳)  
北海道開発局勤務

宮地隆二 (副隊長 28歳)  
名古屋鉄道KK勤務

遠藤禎一 (装備係 27歳)  
小野田セメントKK勤務

橋本正人 (医療係 26歳)  
北大医学部大学院学生

渡辺興亜 (食糧係 24歳)  
北大理学部学生

小野田文彬 (会計係 29歳)  
アリー大学留学中

## 巻 頭 言

北海道大学山岳部長

北大山の会々長

渡 辺 千 尙

われわれの山仲間から1962年にはじめて第一次ヒマラヤ遠征隊をヒマラヤの地に送り、チャムラン峰の山頂に足跡を印することが出来た。次いで1963年に第二次ヒマラヤ遠征隊がナルカンカール峰をめざして進発し、幾多の困難な山旅をつづけた後、このほど無事に帰って来た。そして遠征の記録をまとめてここに報告書を出版する運びに至ったことはまことに喜びに堪えないところである。

第二次遠征隊は思わざる伏兵のために第一次隊のようにめざす山峰の初登頂には成功しなかった。しかし今次遠征もまた色々の点で登山界に裨益するところが大きいものと信ずる次第である。

もとより登山隊は人の和、すなわちメンバーの完全な融和をもって第一義とすることは周知のことであるが、海外遠征にあたっては特にその感が深い。今次の遠征隊はこの点に関しては少しも心配するところがなく、必ずや立派にやってくるものと期待していた。またとかく海外遠征にあたって事を余りにも重大に思い過ぎたり、悲壮感さえ抱くような傾向がないでもない。だがこの隊は極めて担々としていたところに好感が持てた。最近次第に出国の繁雑さが取り除かれたため、ヒマラヤの山旅も気軽に出来るようになりつつある。今次の隊は仰々しいことは一切排除して、少ない経費で簡潔な山旅をするように心掛けたので、この意味においてもこの報告書は今後のヒマラヤの山旅によき参考となるであろう。

しかし結果においてはめざすナルカンカール峰の所在が不明瞭であつたりして、登頂の目的を果すことが出来ず、また多少の国境上のトラブルが起つたりしたことは何としても残念の至りといわなければならない。国際間の動きが微妙な昨今では、殊更に登山計画を密にして、慎重に目的の山を選ぶべきであるという教訓をあらためて省みる必要があることを痛知する。だが一面から見るとこの地域には未知の点が多く、未開拓の領域が多分に残されていると云うことが出来る。それで今次の遠征によって多くの事実が明らかになったので、本報告書は学術上或は登山上に有意義な資料を提出するものと思われる。

今次遠征隊は地質学の研究者が主体となって編成され、地質学上の調査研究が併せ行われたので、いずれ詳細は学術専門誌上に発表されるであろうが、その成果に大いに期待するところである。

終りにのぞみ今次遠征隊は各方面から多大の御援助があつてこそ、はじめて遂行し得たところで、ここに御支援を賜った各位の御厚意に対し、私からも心から感謝の意を表する次第である。

## チベット高原への旅

7月10日、隊長をのぞく4隊員は、P&O汽船の世界一周船“オルソバ号”の客となる。貧乏隊にはもったいないような豪華船、インドまで72000円、18日の旅である。青い海原にかぶ豪華船の甲板にコウラをほし、暑熱の雑踏の中に送った出発準備のあわただしい日々を回想するここちよさ。

我々が船を選んだのは合計300万円に満たない貧乏隊の経済上の理由からであったが、船の魅力を知ったいま、これ以上の旅の手段があろうとは思われない。

出発前に読み残した文献をたくさん船に持ち込んでヒマラヤの知識を少しでもつめこもうとする意欲も、日本びいきのアメリカ娘や、一瞬たりとも退屈させては申しわけないと考えている船の娯楽スケジュールに圧倒されて、ほとんどその実を上げることはできなかった。

香港、マニラ、シンガポールと寄港する港々では寸暇をおしんで見物にいそむ。

不幸な隊長は7月16日ネパールの入国折衝のため羽田から空路カトマンズに出発した。

インドでの通関の業務はどの遠征隊も頭を悩ます問題である。官僚主義の非効率さに私利私欲の加わったインド税関役人の悪徳ぶりを書くための一章はヒマラヤ遠征報告には欠かすことのできないものとなっていて、出発までの準備とともに通関に関する記事にわりあてられる紙量の大きさが、通関のためについやされるエネルギーの大きさをものがたっている。

僕らにとっても、通関は出発以降の最大の関心事であったが、さいわい現地から参加した小野田隊員のインドについての豊富な知識によって、この難関はみごとに解決され、船の到着の8時間後にはインド無税通関のシールをされた1.3トンの荷物はボンベイ・セントラルステーションの倉庫に、はこびこまれているという順調ぶりであった。この異例の通関についての秘術はここにくわしく書くのは適当ではないだろう。秘術はそれを必要とするものみに伝授されるべきである。

ボンベイで一夜はクィーン的首飾りと名付けられる美しい夜景をもつ海岸線の一角、シーフェイスホテルで送る。

7月29日、入国事務をおえて合流した隊長をふくむ6人の隊員は1.3トンの荷物をたずさえて、インド国鉄の3等車の客となり、キャラバンの出発地ネパールガンジにむけ出発した。インド国鉄の3等車は従来いわれているほど、不愉快なものではない。むしろあついモンスーン期にかかわらず、3回の乗りかえをしておの1,500キロの汽車の旅で一度も不快な感じをうけたことはなかった。むしろ朝日ののぼる時から日の落ちる時まで、同じ景色の中を走っているインドの広さや、旅芸人のかなでてくれたインド民謡のかずかず、老婆にもらったバナナの味わ



い、3等車でなければ味わうことのできない庶民の肌ざわりだけが印象に残る。

### ネパールガンジロードにて

汽車の旅はネパールガンジロードというインド・ネパールの国境の街で終り、この駅から4キロ程先のネパール領にあるバザールがキャラバンの出発地になる。この駅からのシワリーク山脈のながめは静内から見る日高山脈の風景にて、まことにのどかである。赤トンボのむれ飛んでいる姿は北海道の秋のさわやかさを思い出させる。僕らはこのインドの北縁の田舎町の駅の待合室にたむろして1週間で過ぎなければならなかった。ボンベイでの通関、汽車での荷物の輸送がこれほどスムーズに運ぶとは考えなかったために、ネパールの査証とシェルパ、リエゾン・オフィサーの到着が間に合わなかったのである。うれしい誤算の精算のための日々はまたインドの不潔さと、舌の焼けつくようなカレー料理に順応するための日々でもあった。駅の近くの特約のレストランに出かけ、真黒にむらがるハエをおいながら、小さなゴミでいっぱいの水で、カレーを流しこむ。3度の食事はかなりの努力を要するが、同時に「僕達はインドに来たのだ、という実感を与えてくれる。調理しているところを見ると、出来上がったものにたかるハエをおうなどは全く無意味であることを知る。

インド人が便所を作らないで、野糞をしてその後を水で洗うという習慣は御存知の通りだが、我々がたむろしている待合室の前の線路が絶好の野外トイレとして利用者が多い。毎朝、水を入れた小さなツボをさげた人達が三々五々とやって来て毎日のつとめをすましていく、なじみ深い嗅気が1日の活動のはじまりを知らせてくれる。そのあとへ、子供にひきいられたイノシシのようなブタの一団がここに追いつまれて来て嗅気をとり去ってくれる。その後に入ってくる一番列車、その客を迎えに来る馬車の鈴の音、……今もこのスケジュールは厳密に守られているにちがいない。

この町での最後の2日間は、アメリカン・ミッション教会で世話になる。布教のためにこの地に腰を落着けて25年になるというトマセック嬢は大変な日本びいきで、大げさな身ぶりて心からのもてなしをして下さった。“More Tea?” 何杯もの紅茶やケーキをすすめてくれた、にこやかなお婆ちゃんの姿は、砂糖が切れてモーニング・ティーが飲めなくなった時、何度僕らの話題にのぼったことだろう。今度の旅行でお世話になった沢山の方々の中でも特にわすれられない人の1人である。

8月9日2台の水牛車に荷物をひかせて、ネパール国に入国、バラ・ハキム邸の庭にテントをはって、いよいよキャラバンの出発準備をはじめ。横浜でパッキングした装備・食料を全部ひらいて再梱包する。ひと月前、横浜でパッキングをした時にくらべれば、熱帯樹のしげるネパールガンジでの作業はよほど楽に感じた。ただソロ・クンプからやって来たシェルパ達は、あつさにあてられてのびてしまっている。

## キャラバン

8月12日、25頭のポニーに荷をわけてキャラバンに出発。ネパールガンジは西ネパール最大のバザールであるが、モンスーンの今は大部分の店が戸をおろして人影も少ない。1キロ程で終るバザールのそとは、テライ・ジャングルの外縁まで延々と田んぼがつつき、沼のように泥水にうまっている。キャラバンはまずお湯のようなこの泥水の中から始まった。

2日目にはテライ・ジャングルにはいつてしまった。モンスーン・シーズンの道路として確保されているラプティ川ぞいの道は、たんたんとして意外に明るい。何度も渡渉しなければならぬ川はいずれも赤い水をたたえてよどんでいて、飲料水を得るのがむづかしい。生活環境が、わるいのであろうか、ジャングルの民、タルー族の村はめったに見あたらない。コプラとサソリとヒョウの恐怖。さいわい僕等は被害を受けることはなかったが、恐怖をつのらせる話はいくさるほどきいた。テライの恐怖はそれだけにとどまらない。第一そこに住むタルー族のスタイルが不気味である。やせた身にフンドシひとつをまとい、ゲタをはいて、片手に柄の長いまさかり、片手には番ガサをもったタルーの親子に最初に出合った時は、正直なところおそろしくてカメラが向けられなかったくらいだ。村にとまると、ベッドに寝ていても朝には小指の先ほどもあるシラミやダニがシュラフカバーにこびりついている。

日程をのぼそうとするポニーマンをどなりつけてはいるが、まだ、からだのなれていないテライの中のキャラバンは苦しかった。テライ・ジャングルの幅は約40キロだから普通ならば1、2日で越えられるのだが、モンスーンで増水しているババイ川を渡るには上流へ迂回しなければならない。そのためにずっと北西にある目的の山を目指すのに、最初の1週間はジャングルの中を南東に向けて進まねばならない。

キャラバンに出発して4日目、シワリーク山系を越える日、ポニーマンが、かつてに地図にない新ルートを通ったため、宮地、遠藤、渡辺の3隊員が本隊からはぐれてしまった。この3人の隊員は、カナ(めし)、パニ(水)の2語だけをあやつって、めしとベッドにありつき、2日後に本隊をさがしあてて、ババイ川の河畔にひらけたダン盆地の中心地、トリシプールで本隊に合流した。

トリシプールではネパール近衛師団の人々に大変世話になる。ネパールの軍隊はおせじにも、つよそうだとはいえないが、兵士はみんな親切である。快適な宿舎を提供して食事に招待してくれたうえに、これから先のポニーの世話までしてくれた。夕食前のバレーボールの親善試合は適当にあしらわれて、僕等はネパール陸軍に惨敗す。

### トリシプールよりジャジャルコットへ

ネパールを縦断していると、北に行くほど人間の質がよくなってゆくのを感じる。北に行くほどヒンズー教の影響がうすれてなじみ深いモンゴリアンの血が濃くなることからそう感じ

るのであろうか。トリシプールでポニーをかえた時に、まずそのことを感じた。ネパールガンジのポニーマンの、日程を引きのばすためのサボタージュや、他人のポニーだと荷物をふりおとして暴走するのを見ている知らない顔をきめこむ利己的な態度にさんざん悩まされていた僕等は、ポニーマンがインド人からネパール人にかわったことを大いに喜んだものである。

今にして思えばこの新しいポニーマンとて、そんなに人格ゆたかな人間であったわけではない。ごくあたりまえの事をやれるのがここでは、いい人間だと考えられたにすぎないのだ。頭のいいナイケ（西ネパールには東のようなナイケ制度はないのだが、ここではそう呼んでいた。）にはポニー賃を大分ピンハネされてしまったが、たいしたトラブルもなく、まずは順調な旅をつづけた。ダン盆地を過ぎるとマハバラート山稜にかかるのだが、この山稜にかかるモンsoonの影響が強くなり、2000米以上の稜線は厚い雲をかぶってほとんどその姿を見せないし、午後は毎日のように雨になる。雨の中のキャラバンは気温が高いせいか、さして苦にならないが、道に乱立するヒルのむれには辟易させられる。ヒルの吸う血の量など実際には大したことはないのだろうが、丸々とふくらんだヒルをはがす時のくやしき。身体の中の血がゲツリ減ってしまったようないやな感じにおそわれる。マハバラート山稜のいくつかの峠を越えてキャラバンはいったんベリ川の河畔まで下る。ベリ川にかかっているヘンダーソン・ブリッジとよばれる大きな吊橋までがポニーの使える限度で、これからのちはチベットの世界に入るまで荷物は人の背にかつがれて運ばれることになった。

### ジャジャルコット

ジャジャルコットは1600米ほどの山の頂に作られた街である。今は学校になっているが、山の頂に石でかためられた古城はかつてのジャジャルコット王国の栄華をしのばせる。この国を支配していた王は相当進歩的な王であったにちがいない。ババイ川にかかる50米以上もある吊橋はイギリスの技師に命じて50年も前に作らせたものであり、その資材はすべてインドから人間とゾウによって、はこばれたものである。

山の頂の街であるのに遠くから鉛管で引かれた水道のおかげで水はふんだんに使える。家並みの中には屋根がスレートでふかれたものもある。ここだけが特に、ゆたかである理由が見あたらないのに、今までに通って来た村々にはない豊かさがあるのは為政者の力のせいなのであろう。

ジャジャルコットでのクーリーの募集には3日を要した。これはリエゾン・オフィサーの怠慢にもよるが、前にここでクーリーを集めたインディアン・サーベイの人づかひの悪さのために遠征隊に対する評判がきわめて悪いことが影響している。<sup>3</sup>この地方では5ルピー（I.C）以下では人夫は集められない、という役人の言にかかわらず結局3ルピー（I.C）50人の人夫をマイナと呼ぶ村まで5日で契約することが出来た。ここの人夫は玉石混淆というところ。やはりクーリーはもの言わぬポニーよりはあつかひがむつかしい。

この頃からどなりちらしてクーリーの尻をたたく役はリーダー格のパサン・シェルパ、どなられて逆にすごみかえすクーリーを老獺になだめすかす役は彼の女房役アン・テンパ、2人のシェルパがうまいコンビをつくって有能な働きをしめすようになる。マイナまでの行程も小さな登り降りをくりかえす。雨の多いキャラバンであった。

マイナでの人夫の交代はあいにくお祭りにぶつかり、3日間の停滞を余儀なくされた。人夫の交代に手間どるのは旅をいそいで高い人夫賃を払うよりは、ゆっくりねばって安く値切る方がとくだという、このころになって悟った生活のちえというものだ。経費を安く上げるためには第一に荷物を少なくすること。次には旅をあせらぬこと。この2つの原則を守らなくてはならない。商品経済の影響を受けている地域では初めは団結して高い賃金をふっかけていても現金ほしさに裏切る奴が必ず出てくるものである。マイナでの賃金の交渉もよその村からつれて来たクーリーをまず安く契約してそれをたてに他を値切るという作戦で、1日3ルピー(I.C)でジュムラまで5日の行程を契約することに成功した。マイナの辺りからはあいかわらずくりかえさねばならない登り降りの毎日の行程は、高低差が大きく、峠の標高も高くなる。峠が今までのカシヤマツの林ではなく、モミ、ツガにおおわれていることが多い。9月5日に4000米のチャクレー・パスを越える。3,500米の森林限界を越える山脈が美しいお花畑でおおわれて静かに波打っている光景は圧巻である。`花の最盛期にはその花の香で息苦しくなって倒れる人がいるのです。ジュムラの学校の先生のお話がさもあらんと感じられるほどの広大なお花畑であった。この峠は初めての4,000米なので到達限度改新の儀式よろしく軽い頭痛を感じるだらしなさであった。9月7日、キャラバンの行程の中程にあたるジュムラに着く。

## ジュムラ

かつてこの附近を治めた王の都であり、西ネパール有数の町である。町といっても日本の感覚で云えばやっとなり村役場のある程度の村である。メインストリートの両側に雑貨を並べた店が10数軒、その中ほどにうす暗い土間で紅茶と羊のカレー煮を提供する喫茶店、あとはヒンズー教のお寺とコミショナー(県知事級)の事務所兼邸宅、学校、郵便局、警察、インド人のいるチェックポスト・オフィス、少し離れて軍隊の兵舎、これがジュムラの全てである。これだけの構成の町の外側に田んぼや放牧地をへだてて小さな集落が散在している。メインストリートの入口に立てられた道標には東一ポカラ、西一ダイレーク、北一シミコットと書いてある。ネパールでは雨期の病虫害をさけるためと、農作物により多くの日照時間を得るために集落や畑は山の中腹に作られていることが多い。急峻な山腹にはりついたような農村風景は我々の感覚ではどうもおさまりが悪い。上から見おろす農村風景は見なれているが、頭の上におおいかぶさるような畑や集落にはなれていないので、こんな村を見るとなれないうちは体のバランスがくずれるような錯覚におちいったものだ。その点ジュムラはネパールにはめずらしく、川沿いに開けた町なので、安定感があって、心の安らぎが感じられる。

ジュムラにはさる豪商が新築している家の2階をかりて、3日間滞在した。東海大学の遠征隊と厚生省の伊藤氏がこの町に足跡をのこしている。“Made in Japan”のセーターとマフラーをまとめて人なつく我々のもとを離れない学校の先生と、ポロシャツに半ズボンでそのお相手をしている隊員の組み合わせは少々こっけいである。ネパールでは自分の持物を全部身につけて物持ちぶりを誇示する風習が強い。我隊のリエゾン・オフィサーも支給したクリノメーターを山の中ではボックスに大切にしまっているが、こういう町に出てくると腰につけてみせびらかしている。インテリの彼がその使い方を知らないほどであるからこんな山の中では磁石の使い方など知っている奴はまずいない。だから好奇心の強い子供達には、幸い我々のキャラバン・ルートは北に向っていたので、<sup>3</sup>俺達は、この針の方向に行くのだよ、と説明することにしてた。

### シミコット

東ネパールに比べ西ネパールではナイケ制度が発達していないために、人夫集めには苦労する。人夫は1人1人個別に交渉して契約しなければならないのである。経済の発展がおくられていて物の動きが少ないためにナイケ制度の発達が阻害されているのであろう。それでもジュムラ以南では5~7日ぐらいの行程をまとめて契約することが出来たのだが、ジュムラより北ではますますことがめんどろになって、人夫は村から村の間の一区間しか契約出来ないようになる。次の村が1マイル先であればその村までしか荷物を運んでくれない。したがって1日に3つの村を通過するのであれば、3回人夫集めをやって3回賃金の支払いをしなければならぬ。煩雑なことおびただし。これは単なる習慣ではなくフラク制度といって人夫事情の悪いこの地域で政府が軍隊や役人の移動をスムーズにはこぶためにこういう制度をしいているのである。これは旧い制度であるが、事情のかわっていない現在も活用されている。つまり政府関係の荷物はすみやかに次の村まで運搬すること、役人、軍人には旅行に必要な食糧を定められた価格で売却すること、という2点を骨子としたのがこの制度である。そして荷物運搬の賃金は1個につき、2マイル1ルピー(50円)と定められている。僕はチベット帯に入るシミコットまでの間はこの制度を利用して旅をつづけた。

ジュムラ以北では商品の流通がますます少なくなり、自給自足の体制が強くなるので金をあまりほしがらない。したがって人夫集めがむづかしくなる。フラク制度は経済原則によって成立っている制度ではないのでその実行にはある程度の強制力が必要になる。僕らの隊にはジュムラから警官1人が同行して、人夫集めにあたりましたが、スムーズに運ばぬことが多く、キャラバンは遅々としてはかどらない。キャラバンを強引に進めようとして隊は2隊、3隊と再三分裂をくりかえさねばならなくなった。人夫だけではなく食糧の調達も意にまかせず、ドクターの橋本から、<sup>4</sup>このままでは血中蛋白濃度が低下して登攀に悪影響が出るから……、という勧告が出るほど何も買えないことが多かった。ニワトリが2~3日に一度、野菜はほとんどキ

ユウリだけという状態である。ひもじくてがまんが出来ないというのではないが、夜のテントに食糧の話題が多くなる。シワリーク山脈を越えて以後、午後には毎日のように降っていた雨も、9月11日をさかいに降らなくなる。モンスーンが明けたのだ。まだ10日以上もの行程をのこして早くもモンスーンが明けたことは我々の気持ちをいらだたせる。

キャラバンに出発して40日目の9月20日、マゴール・パスから初めてナラ・カンカール峰(実はニャモナニール)が望まれた。雲の切目に見る山容はまだ遠くで定かには分らないが、チベット高原の小さな凹凸の中にひときわ高くそびえている。この日も隊は3つに分裂し、隊長は10数人のクーリーと4000米の峠にビバークしなければならなかった。

御存知の通りネパールにはカースト制度があるが、ネパールのカースト制度はインドのそれとは少し趣を異にし、カーストの単位が村にあることが多い。(少なくとも西北ネパールではそうなっている)例えばこの村はチェトリー(カーストの名称)の村、この村はタクリーの村という風に村が単位でカースト上の位置づけがなされている。そしてカーストには食物や労働に対する色々なタブーがひっついている。この日の分裂の原因はこのカースト上のタブーに起因するものであった。フーチャという村での人夫集めは近隣の3村から人夫を集めることが決められた。この村ではちょうど、村のほとんどが放牧場に出かけている時である上に次の村までの間に大きな峠(マゴール・パス)があって行程がきついで、人夫志願者がいない。やむをえず、フラク制度により、募集というよりは徴発という感じで人夫の駆り集めがなされた。3村のうち2村はこの徴発に応じたのだが、他の1つの村だけが、<sup>レ</sup>俺達はタクリーという高いカーストだから人の荷物なんかかけねえ、と開きなおって来た。そうするとともにあまり乗気でない他の2村のクーリーは<sup>レ</sup>奴等が行かなければ俺達も行かない、とごねはじめる。それを警官が棒をふりまわして行かせようとする。気の弱い者から順番に出発という状態なのでキャラバンがばらばらになってしまうのである。キャラバンがばらばらになると本隊(どれが本隊か分らないほどばらばらになることもあるのだが)についていない連中は寝具も食糧もなしにすぐさなければならぬことになる。この貧乏クジの役割はヒンズー語がしゃべれるという理由で小野田が引きうけることが多かった。

カーストの話が出たついでにもうひとつ、カーストと食物に関するタブーの話を書いておこう。

カーストには先ほどのタクリーの労働に対すタブーと同様に食物に対しても色々なタブーがある。例えばニワトリを食べないカーストだとか、ニワトリは食べないが卵ならいいというカースト……いろいろなのがある。キャラバンをしているといろいろのカーストの村に行きあたる。卵だけを食べるためにニワトリを飼っている村では雄ドリの値段が安いし、卵もニワトリも食べないのにニワトリがいる村では両方ともべらぼうに安い。ただそんな村で卵を買おうと、何割かは必ずくさっていたり、ヒヨコになっていたりする。一番ひどい例では10個のうち9個がヒヨコになる寸前のものであったことがあった。この時はさすがにシェルパが抗議して

金を返えさせたが、普通10個に4個や5個くさったのがあったとて抗議もしない。『サーブ運が悪いね、』といった顔をしている。たまにありついで卵がどろどろにとけて出た時にはまったく泣けてしまうのである。

いくつもの隊に分れていたキャラバンも9月22日ようやくシミコットに集結することが出来た。

シミコットは我々のたどったルートでは最も北に位置する交易の町である。ここでは、北から来るチベットの生産品(主として羊毛)と南から来る農産物が交換される。そしてここではチベット人を介して入って来た中共の製品にもちらほらとお目にかかることが出来る。

相当な物資がここで取引されているのは確かなのだが、ジュムラのようなバザールは見あたらず、どんな交換の機構になっているのかはよく分らない。タケ・ヒマールの前山にかこまれ、はるか下にカルナリ河を見おろす広い台地の中の50戸ほどの集落はひっそりと静まりかえって人影も少ない。チェックポスト・オフィスや警察がおいてあるチベットに面する重要な町なのに、意外に静かな町である。いつもとちがつてテントに野次馬もやってこない。

ここでも食糧と人夫の調達に警察のお世話になったが、いずれもスムーズには運ばず、またしても隊を2分して出発しなければならなかった。

### チベットの村へ

シミコットを境にして、人種的にも風土・文化的にもチベット帯に移行する。シミコットは色々の面で北と南のジャンクションであり、混血地帯である。

シミコットからのポーターはツピア族にかわる。このツピア族はチベット人とネパール人との混血で立派な体格をしており、頭には野武士のようなチョンマゲをつけている。トニー・ハーゲンの本に見るこのチョンマゲ族の写真からは気に入らなければ『一刀のもとに……』というような精悍さを感じられるのだが、これは全くの見かけだおしであることを知った。

混血は種を強化するという法則はあるが、この混血族はひどくいくじがない。第一こんな表情に変化のない人間はそうざらにはいない。目のかがやきのなさは精神病者のそれに近い。ネパールでは北に行くほど人間がよくなるという経験的法則からはずれるこのチョンマゲ族のためにシミコットからの第1日は賃上げ要求のサボタージュで、わずか2マイルしか進めないというふがいなさであった。

ジャンガまでの5日間はずっとチョンマゲ族に荷をゆだねたが、ゾウ(ヤクと牛のあいの子)を使うようになって後半は大したトラブルもなくますます順調な行程であった。

この区間にはニンヤル・パスというキャラバン中最高の峠(5200米)がある。この峠の前後から土地の風貌が一変する。

## チベット高原

<ニンヤル・パスを越える前後の日記から> ニンヤル・パスを越える日、キャラバン用の夏テントが真白になる。U字谷のテントからはサイパルの北面はことのほか美しく望まれる。ヒマラヤヒダに飾られた氷壁、雪煙の舞う稜線、大きな山容のサイパルは西ネパールの雄とするにふさわしい。

峠を越える日はいつもそうなのだが、元気のいい遠藤と橋本が真先に飛出して峠の北をのぞこうとする。この日もニンヤル・パスからは必ずナラ・カンカールの雄峰が見えるにちがいないという長い間の期待に張切って真先に飛出した2人はまたしても裏切られ、そこに見たのは長く北に流れる褐色のU字谷と静かに波うつチベット高原であった。

峠から地形測量を始める。スケールの大きいヒマラヤでは測量は大変である。5000米ではすでに動くのがおっくうである上に、せい一杯の基線をもうけてもわずかな夾角しか得られない。

夕暮のせまる頃、測量でおそくなって宮地と渡辺はシエルパのリンジンを供なって氷河湖のほとりに張ったキャンプへと降って行く。月の光で紫色にそまったU字谷を歩いていると月の砂漠にいるような幻想におそわれる。

峠で出合った隊商から買った山羊の料理が出来上っているだろうと楽しみにしていたキャンプにはその山羊がたき火の周りにねそべって草を反芻していた。『サーブの買ったこの山羊は老ぼれて、その上病気で、こんなもの食えたものじゃありませんや、とシエルパは言う。

チョンマゲ族のタキビには羊の肉がぐつぐつとうまそうに煮えている。それを横目でにらみながら我々は今夜もまたチャーハンの素をお湯にとかしただけのスープと気圧の影響でうまくたけないシンメシだけの夕餉である。この行程には村がないので、食糧事情が特に悪い、使用に制限のないコショウ、トウガラシ、カレーの素、味の素などをヤケクソのようにスープにふりかけるのが習慣のようになっている。コショウ、トウガラシ、カレーは口の中をかつかたさせておいてシンメシをおし込むためのもの、味の素もここでは気休めにすぎない。

この区間の最後の村ジャンガについてはそれがチベット人の村であるということ以外、具体的な情報は全く持ちあわせていなかった。

9月29日、例によって測量でおそくなって下って行く、タクチエ・コーラ（カルナリ河の支流）に沿う夕暮の道は長かった。

ダライラマに忠誠をちかかってネパール領にのがれて来ているカンパ族、石垣の中で大麦の収穫をしている農夫、だれに聞いても『村はもうすぐだよ、と言うのだが、シンメシにスープだけの朝食で昼食をぬいている僕らには、あまりにも長い道に思われた。石にお経をきざんでそれを高速道路の分離帯のように道の中央につんだマニ石の数がふえ、村落の近いことを思わせるようになってからまだ小一時間も歩かねばならなかった。



しかし月の光にかがやくジャンガ村に着いた時にはこんな疲労感なぞいっぺんにふきとんでしまった。

石をつんで作られた砦のような家並みは泥で作られたネパールの村にはない風格がある。先に着いた連中は荷物の整理を手伝ってくれる村民のキビキビした態度を絶賛している。木や薪がふんだんにはこび込まれる。一方では新しく買った羊の解体が手ぎわよく進められている。シエルパの周りに出来た円陣からは大きな笑声が聞こえてくる。こんな活気に満ちたキャンプの経験は今までにはない。とたんに今まで旅して来たネパールの村々とその住民が色あせて感じられる。人夫を監督すると称してついて来たシミコットのポリスもここでは全くうだつが上らない。この村ではネパール語をしゃべれる人間がいないので、棒をふりまわしてどなりちらすことを唯一の職業上の技術とこころえているポリスなど、何とも動きがとれないのである。

頭とひずめ以外の全てを器用に処理するチベット風の羊料理を腹一杯につめこんで、村の中の広場での収穫のお祭り見物に出かける。石の壁を背景に老若男女村の全てが円陣をつくっておどる小気味のよいリズムの中で、48日目にして到着した本物のチベットの感激がふたたび心を一ぱいにする。

タクチェ・コーラと呼ぶカルナリ河の支流には3つのチベット人の村がある。国籍はネパールだが人種的には勿論、文化的、経済的にも完全とっていいほどチベットの側に属している。そしてこの3つの村は共同体をなしており、我々の訪問のような変わった事態には3つの村の村長が協議してことにあたることになっているという。到着の翌朝、村長会議招集の伝令が下流の村にとばされた。

村長の来るのを待つ間、村の見学に出かけた各人が見て来た結論はネパールの村と異なつて家の中に財産のあること。清潔であること。活動的で信心深いことetc.

ドクターの所には患者が続々おしかけ1人でてんでこまいでいる。中耳炎の若い娘のお尻に注射をする時が、この日のクライマックスになった。村医と称する男までが診断を受けに来た。

10月1日、3村の村長の集まる中で往路ベースキャンプまでと帰路ベースキャンプからディングガまでのヤクの契約が成立する。

### チベット高原行

10月2日、25頭のヤクに荷を着んで、タクチェ・コーラをさかのぼって目的の山、ナラ・カンカールに向う。

ティラ・コーラの上流に入するにはプルキ・ラーダ経由と下流のハルジェ村経由の2つの道があるが、前者の方が道がいいとの情報にしたがうことにする。

この時、この辺りの事情にくわしいハルジェ村の村長は地図とはかなり異なる説明をして

くれたにちがいない。しかし僕等が地図を過信していたこと、このチベット人達はナラ・カンカールという呼称の山を知らなかったこと、ネパール語を話す村民がいないので、会話はすべて隊員→リエゾン→シェルパ→村民という経路をとらねばならなかったこと等々のために、この辺りの最高峰はニャモナニールと呼ばれていてそれはタクチェ・コーラの源頭にあるという情報しか得られなかった。

地図によれば我々のめざすナラ・カンカールがこの辺りの最高峰でそれはティラ・コーラの上流に位置することになっている。この日は出発に手まどりわずか3時間の行程しか進めず、タクチェ・コーラの河原にテントを張る。

10月3日、プルキ・ラーダに登る。チベット高原はこの峠から始まる。峠といったがこれから先は大きな下りがないのだから峠というより高原の取付きといった方がいいかもしれない。残雪のまばらなゆるい起伏が北に向って延々と続いている。

その起伏の中に雲の往来の激しいニャモナニールを見る。2つに分けた双耳峰はいずれも急峻で岩っばい。

大きく迂回して来たタクチェ・コーラに再び合し、広い河原にテントを張る。この日のキャンプは5060米。歩いている時は頭痛が激しく、ルートマップの作製が苦痛である。

10月4日、6時間のキャラバンでナラ・カルカと呼ぶ氷河湖のほとりに着く。ここが契約の区間の終点だと言うが、ニャモナニールにははるかに遠い。

翌日、契約を半日延長してさらに奥に進む。チベット高原はかつての大氷河時代に氷河によってけずられて出来た地形なので、焦点がぼけていて地形の把握がむづかしい。水の流れだけが、地形把握のよりどころである。

これこそタクチェ・コーラの源頭という感じのところを何度通ったことだろう。峠のように見える台地の向う側の水はあいかわらずこちらに向って流れている。地図とは全くちがう地形なのである。川の流れは30軒以上にわたり地図に記載されているのと反対の方向に流れている。

昼少し前、高所障害でひらひらになって、タクチェ・コーラの源頭に着き、もはやヤクも進めぬのでベース・キャンプを設営する。

ネパールガンジを出発して54日目であった。高度計は5,600米を示していた。1軒ほど先の分水嶺の向う側にニャモナニールがすどくそびえている。そしてヤクマン達はこの分水嶺が国境だと言う。それならばあの山は中共領ではないか、B.C.の設営を祝うヨーカンと緑茶のコンパは期待と不安の入りまじった、地形論議がつきない。

### ニャモナニール峰へ

B.C.を設営した位置は分水嶺にさえぎられて目的の山が見えない上に、山までかなりの距離がある。しかしヤクではこれ以上先に進むことは出来ない。

強くテントをたたき風は冬の季節風が始まっていることを感じさせる。モンスーンが明けで少なくとも15日はたっている。モンスーン明けの好天をねらわねばならない我々にとってはこの時間の経過が致命的なものになる恐れがあった。高度順応のための休養なぞ許されないあせりがあった。

B.C. 設営の次の日から本格的な活動が始まる。偵察隊は2つに分かれ各々1人のシェルパを伴ってニャモナニールの偵察に、他は荷上げにまわった。荷上げといっても分水嶺を越えた向う側の谷(ヤクマンはこの谷を降ると2日で中共領のポランへ行くといっている)まで荷を運ぶことで、高度は全くかせげない。むしろ荷下げになるほどである。

偵察隊は山へのルートが発見出来ないばかりか、自分達のいる地形の概念もつかめずに帰って来た。先にも書いたがこの辺りの地形は全く判断に苦しむ。同じ谷を見て来た2人の隊員の間でその谷はどちらに流れているかで意見が分れる程なのである。

次の日からは偵察は3隊に分けられた。一隊はニャモナニールに向ってテントをのぼしてルートの偵察に、他の2隊は地形の概念をつかむための偵察にまわる。

登頂ルートの偵察隊はベースキャンプの1軒ほど先にもうけたデポからさらに4軒ほど北の氷河湖のほとりにC.I.を設営、そこを拠点にニャモナニール直下の氷河にまで足をふみ入れた。氷河の標高は5800米、幅、奥行とも4軒以上もあるフラットな氷河で双耳峰のように見えるニャモナニールI峰とII峰との間に横たわっている。

双耳峰のように見えたI峰とII峰はここから見るとI峰はますます高く鋭いのに較べ、II峰は標高も低く雪の少ない岩はだもさほど鋭くはない。

この氷河からの高度差はI峰が1500米、II峰が1000米と見た。

I峰には南からのルートは見あたらない。我々は本峰から東にのびる支稜を登ってその裏にあるかもしれないルート(ここは明らかに中共領なのだが)を発見しようと試みた。氷河の中ほどに登攀用具をデポして帰って来たC.I.には、<sup>①</sup>地形偵察の結果ヤクマンの言うようにB.C.の上にある分水嶺が国境で、それを越えたデポとC.I.は越境していると考えられるので、すみやかに撤収すべし、<sup>②</sup>という隊長の命令がとどいていた。

6,000米まで上げた装備を撤収して、40軒の荷にあえぎながら帰えりついたB.C.では手まわしよくヤクが用意されており、ヤクマンの情報にしたがってずっと南にあるこの次に高い山への転進が決められていた。

この次に高い山、ヤクマンは<sup>③</sup>その名はタクプーと呼びここから2日南へ行つた所にある、<sup>④</sup>という。

第二のベース・キャンプへ

10月10日、次に高い山がナラ・カンカールであることを願って転進を始める。高度順応を十分にやらずむりなアルバイトをしたため、ほとんどの隊員が体に<sup>⑤</sup>むくみ<sup>⑥</sup>が来ている。

途中以前に泊ったナラ・カルカの湖のほとりに一泊、翌日広い高原を横断してタクチェ・コ

ーラのもうひとつの支流に入り（地形についてはナラ・カンカール考の頁を参照のこと）タクブーと呼ぶ山群の氷河の舌端の近くに新しいベース・キャンプを設営した。タクブー山群は4つの大きなピークとそれを取りまくいくつかの小さなピークからなっている。

ベース・キャンプの正面には大きなピークの1つであるマッターホルンに似たピラミッド型の鋭いピークがそびえている。

### ナラ・カンカールを捜す

1日の休養日をおいて、10月12日から偵察開始。偵察といっても今度はルートの偵察ではない。24,064 ftのナラ・カンカール発見のための偵察である。

新しいB.C.の標高は5,200米。初めのベース・キャンプから400米ひくい、ここから見えるタクブー山群にはどう大ききに見ても1,500米以上の比高を持つ山はない。つまり6,500米以上の山は見あたらないのである。仮にニャモナニールが24,064 ft（約7300米）のナラ・カンカールでないとすると、どこかにその標高の山が存在するはずなのだ。まずその山を見つけ出さねばならない。

10月14日から5日間の予定で隊を2つに分け、一隊はタクブー氷河を囲んでいるピークの1つに登り、ほかの一隊は附近を測量して、地形の概念を明らかにすることにする。5日間の偵察、測量でタクブー・ヒマール周辺の概念はほぼ明らかになったが、やはり僕らのさがしているナラ・カンカールはない。僕はナラ・カンカールとはティラ・コーラの上流の国境稜線上にあって7,300米程度の標高を持つ山を考えていた。それに対して、偵察の結果ではティラ・コーラは少なくとも地図に記載されているような形では存在しないし、6,500米以上のピークはこの山群には見当らない。国境稜線がどこにあるかは全く判定がつかない。帰途の日程はヤクが迎えに来る日が11月4日とすでに契約されているので、のこされた日数はわずか2週間しかない。偵察と測量の結果をもちよつての議論は深夜まで続いた。

ともかくタクブー・ヒマールの最高峰に登攀しようという意見、最高峰といっても6,500米を越えないような山に残りの2週間を費やすことは無意味であるという意見。ナラ・カンカールの存在そのものについても各人によって、さうとうの意見の開きが出て結論を得られないまま、登攀をあきらめ氷河調査に専念する、という隊長の決裁がなされた。

地質調査が大きな目的の1つである我が隊では全ルートについてルートマップと地質のデータ収集を行なって来た。集めた石のサンプルもかなりの量にのぼっている。しかしヒマラヤに行こうという元々の動機は山登りにある。山にとりつかれた人ならば一度は考えるヒマラヤへの夢、この夢をはたそうとするのが今度の遠征の大きなエネルギーになっていたのである。にもかかわらず目標の山も見つからないままに山登りを断念することが決められたのである。登攀を主張した隊員は勿論のこと、山を切ることに決心した隊長も含めてこの結末を晴々とした気持ちで受け取れる者はいるはずがない。午前2時、全天にきらめく星の下、口をきくことも

なく放尿、冷々としたシュラフザックにもぐり込む。

その後2週間は氷河調査、地形測量についやされた。ただこの間に地形測量にたずさわっていた宮地とシェルパのアン・テンパが地形を誤認して越境し、中共の取調べを受けるという事故を起した。幸い中共軍の好意的な取扱で、3日間の取調べの後、ことなく釈放された。

## 帰途につく

B.C.のそばを流れる川の氷が日一日と厚くなる。最初は岸からくんでいた水が今ではカナヅチを持って行かないとくめない。

11月5日、3頭のやくが到着しないので、荷物の一部と小野田とパサンをのこしてB.C.を撤収する。

ハルジェ村への峠を登りつつ、ここ数日來の冬のおとずれですっかり老け込んでしまったベース・キャンプとタクプーの山群をもう一度ふりかえる。目的の山も発見出来ないままに帰途につかねばならない無念さと同時にまだ低地にのこっているであろう緑への郷愁を感じる。

60疋の荷物をつけたヤクは深い雪にうずまりながら力強く進んでいる。インド、ネパールの水牛、チベットのヤク、この2つの動物は各々の民族と文化を象徴しているように思えてしかたがない。僕は水牛からは怠惰とどん欲さを、ヤクからは野生の力強さを感じるのである。ハルジェ村、この村はタクチェ・コーラに沿うチベット人3村の中でもとびぬけて美しい。モレーンのおし出した谷間に石ころ一つとどめない美しい畑の土の色にはまったく見惚れてしまう。

古城のような風格をたたえたハルジェ村は過酷な自然条件の中にこの土の色をまもることの出来るたくましいエネルギーにまもられて、安泰であることを感じた。

私達の宿泊はお寺の本堂があてられた。見物にやってくる村人達は「オム・マニ・ペメ・フム」とお教をとえ本堂の中央の大きなつりがねをまわして、シェルパの周りに出来た人垣の中に入って行く。

村人のさし入れてくれた<sup>チヤン</sup>濁酒に酔って久しぶりに深い眠りにつく。

ハルジェ村から1日行程のところにとつたタトパニと呼ぶ温泉とかつての村の廃墟がある。村人の説明によればこの村は150年ほど前チベットからせめこんで来たカンパ族という僧兵に亡ぼされたのだと言う。

このタトパニで残りの荷物を待ちながら湯につかって5日間滞在する。測量の整理とあいもかわらずのナラ・カンカールに関する議論で5日間はあっという間に過ぎてしまう。

11月12日、後発隊が合流、帰途の態勢がととのってタトパニを去る。

この日の日記「——、快適なキャンプをたたむのはつらい。このキャンプを去り難いのはキャンプ地が快適だからだけではない。この地を去ることはチベットを去ることを意味するからである。タクチェの谷に初まるチベットとチベット人の魅力を知った今、無気力でいじきた

なく、不潔なネパール人の村々を旅するこれからの旅は、単に日本へ帰るための旅にすぎないような気がする。タトパニ村の廃墟、プルキ・ラーダに初まるチベット高原を何度もふりかえった……”

もうすっかり冬がおとずれたニンヤル峠から1カ月をすごした彼方を振りかえる。チベットの人々、空気のうすい荒りようとした高原、いつの日にこの情景はぬぐいさられるのであろうか。再来を約して緑の国へと降りていく。

帰途は初めてニャモナニールを見たマブー・パスが雪にとざされて通れないため、カルナリ沿いの迂回路をとった他はジュムラまで往路と同じルートをたどった。事情を知った土地なので行程は比較的スムーズにはかどるが、それだけに新鮮味に乏しい。

話は変わるが、ネパールもインドと同様便所を作る習慣がない。村の中の道が公衆便所を兼ねている。そして悪いことにはインドのように野糞を処理する豚がいないので糞は道にたまる一方である。往路にはモンスーンの雨でぬかるみになった、この糞の道にはまったく泣かされた。大げさに言えばモンスーンのネパールの村は、大腸菌の沼の中に浮んでいるような格好になるのだ。

乾期の今はこの沼がないのでどの村もみちがえるようにきれいに見える。ただこの季節にはハエがやたらと多い。朝夕はさほどでもないのだが、日中村の中で食事をしようものなら何百匹というハエの群にとりかこまれてしまう。この頃にはすでに日本的感覚の清潔感はマヒしているのでハエがたかっただけは意に介しないが、その数があまりにも多いのでまことに五月蠅存在である。

12月4日ふたたびジュムラに帰着、来る時は地図に印刷された活字の大きさの割に貧弱なのでがっかりしたこの町が、今は大都会のように思える。町自体もモンスーン中とちがって活気がある。郵便局で手紙を受取って喫茶店にかけこむ。モーニングティーが切れて久しい。モーニングティー、こんな習慣は本の上だけの知識だったのだが、今ではこれがないと生活のリズムが傷つけられたようで、フラストレーションの原因になっている。シブ味の口のにこるダストティーとピーナツの買食いで都に來た喜びを味わう。ジュムラからは往路とは異なり、ダイレック経由の道をたどる。4000米のチャクレー・パスが雪でとざされているからである。

12月7日、20人のポーターをネパールガンジまで15日間、1日5ルピー(250円)で契約しジュムラを發つ。

ここでドウラギリの南を通ってポカラへぬける計画の小野田、渡辺とシェルパのタワと別れる(彼等はポカラへぬける許可が得られず、結局20日間おくれて本隊と同じルートをたどることになる)。

ネパールガンジとジュムラの間には今自動車道路と称するものが、道沿いのすべての老若男女をかりあつめて建設されつつある。ウエスタン・ハイウェーと言うのだそうだ。5月にはこの道路を通して国王が訪問される計画だと言う。帰途はほとんどこの自動車道路に沿って歩

いた。

唯一の道具らしい道具である1本の鉄棒を使って大きな岩に挑戦しているところ、楽隊のリズムにあわせて板切れで山をけずっているところ等々、色々の工事現場を通った。相当のエネルギーをついやしてこの道路は建設されつつあるが、道といえば最大傾斜面に直角に挑む道しか作らない山の民には、自動車の通る道を作ることは不得手と見え、とても自動車の登れそくない勾配や、谷の向うとこちらで数米も段のついているような所が各所に見られた。

12月14日ダイレーク着。石畳を敷いた美しい町である。町並みだけではない、女性がとても美しい。染めたのかよごれてそうなったのか分らない、黒い布をまとった女性ばかり見て来た我々には、プリントの花模様の服やあてやかな口紅の女性の姿はことのほか美しく感じられた。プリントの生地はインドが近いことを感じさせる。

ベリ川をフェリボートで渡り、ババイ川は渡渉して渡る。どちらも往きにその上流を見たのとくらべると、とても同じ川とは思えないほどおだやかである。ダイレークからは人の往来がはげしくなる。今は交易の最盛期なのである。

危険だから1人歩きはしないように、とりエゾンに注意されたテライのジャングルも人の往来がたえない。人が多いために安心感もあって乾期のテライには植物園を散歩するような心地よさがある。

テライを出るとインド平原である。キャラバン最後のテントはテライの外縁に張った。地平線にまで続いている取り入れのすんだ田んぼに真紅の夕日が落ちて行く中を、都車のような大きな車輪をつけた牛車が仕事を終えて帰っていく。

無事に文明の社会に帰りついたという喜びと、ついに来てしまったかという失望の入りまじった複雑な気持で速くの汽笛を聞いた。

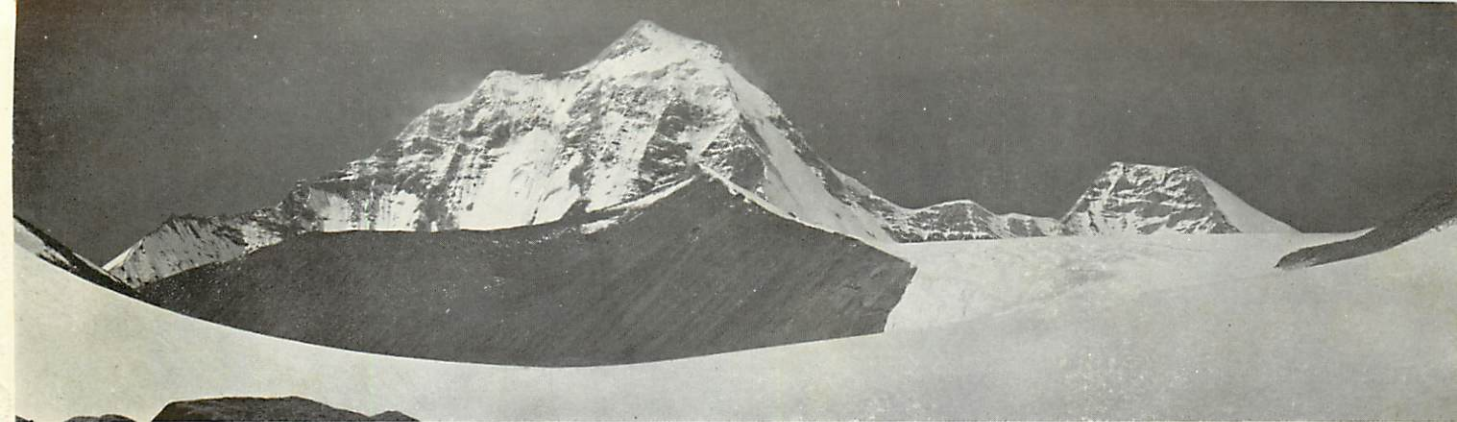
12月22日、140余日ぶりにバザールがにぎわいを見せている、ネパールガンジに帰着し、長いヒマラヤの旅が終った。



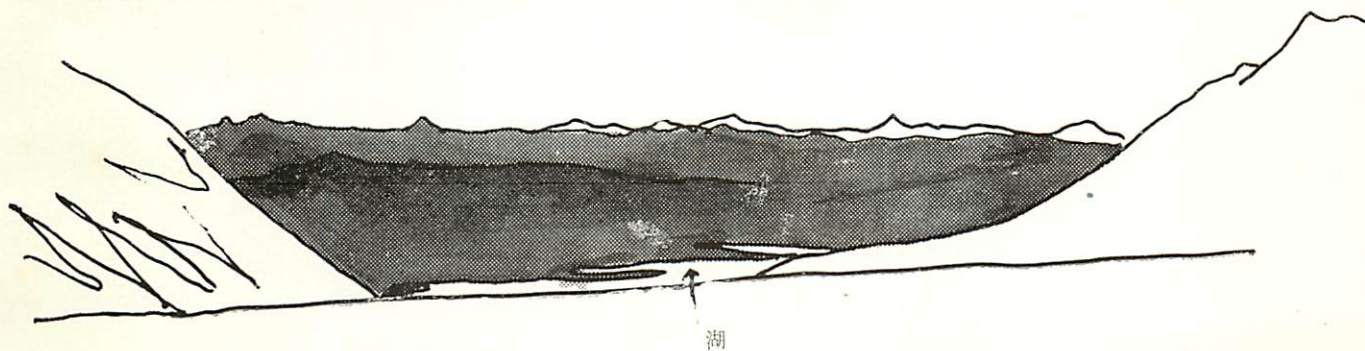
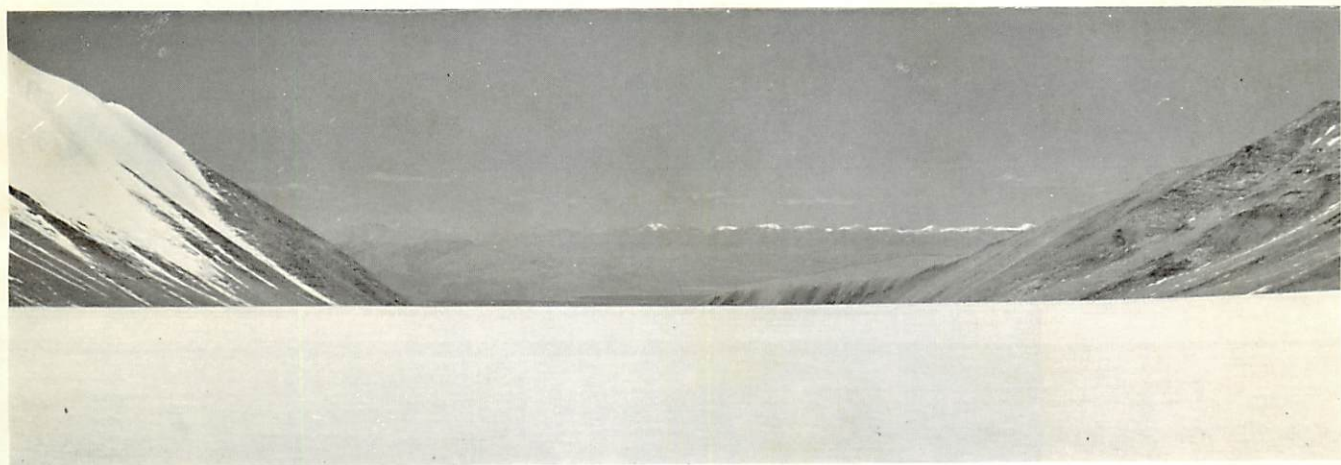
## 西ネパール探検小史

カルナリ河上流のチベット・ネパール国境附近にタクラコットという町がある。近くにカイラス・グルラマンダータ・マナサロワール湖をひかえているせいか、あるいは語り伝えられる小高い丘の上に立つというお城の神秘さが人々の心をかきたてるのか、多くの文明人がそこを訪れた。遠くはスウェン・ヘディン、ロングスタッフから若き日のヘルベルト・ティヒー等たくさんの人の名前をあげることが出来る。慧海がここを訪れたのは、1900年であり長谷川伝次郎がインドの友人とここを訪れ、われわれにその美しい町の写真を持ち帰ったのは、1927年である。この様に西ネパールの最も北の国境近くの町（この町はチベット領にある）には古くから人々の訪れがあったが、一つにはアスコットを経てカリ河沿いを通る巡礼路がととのっていたからだろう。一方タクラコットよりカルナリ河を下ってくると、もう文明人の訪れは数えるほどしかない。ネパール開国後シミコットまでカルナリ河ぞいに入った最初の人は英人ウィリアムズである。彼は1950年に植物調査のため遠征隊をひきいてきた。ティヒー博士がポカラより西ネパールの真中を横切り『名もなき美しき山々』なる一書をだしたのは1953年の旅であった。ぼちぼち知られはじめたカンジロバ・ヒマールに最初にやってきたのは英人ジョン・タイソンで、彼はネパールガンジ、ジャジャルコットと歩き、カンジロバに近づいた。我々のルートは彼のルートにしたがっている。次いで、この辺りなところにやってきたのは女性の隊である。英国のレディス・パーティの人々はカンジロバの一無名峰のいただきをふんでいる。1963年に、日本人がまだ訪れたことのない、ジユムラに三つの日本隊がやってきたのは、あながち偶然の暗合ではあるまい。それぞれネパール・ヒマラヤの片田舎に、まだ知られぬ何かを求めてやってきたのだろう。ずっと西のアピ、ナンパ、サイバル山群には1960年同志社隊がやってきて、この悲劇の演じられた山アピの登頂に成功し、1963年にも同じ同志社がサイバルの登頂に成功している。





ニヤモナニール峰



ニヤモナニール峰の右手のコルより北を望んだところ、なだらかな氷河の下に湖がひろがる。これが聖なる湖マナサロワールであろうか。



モンスーンの雨で増水した河を渡るポニーとポニーマン

キャラバンはじまる



ネパール人の母と娘たち



美しい牧場を目の前に進むポーター達



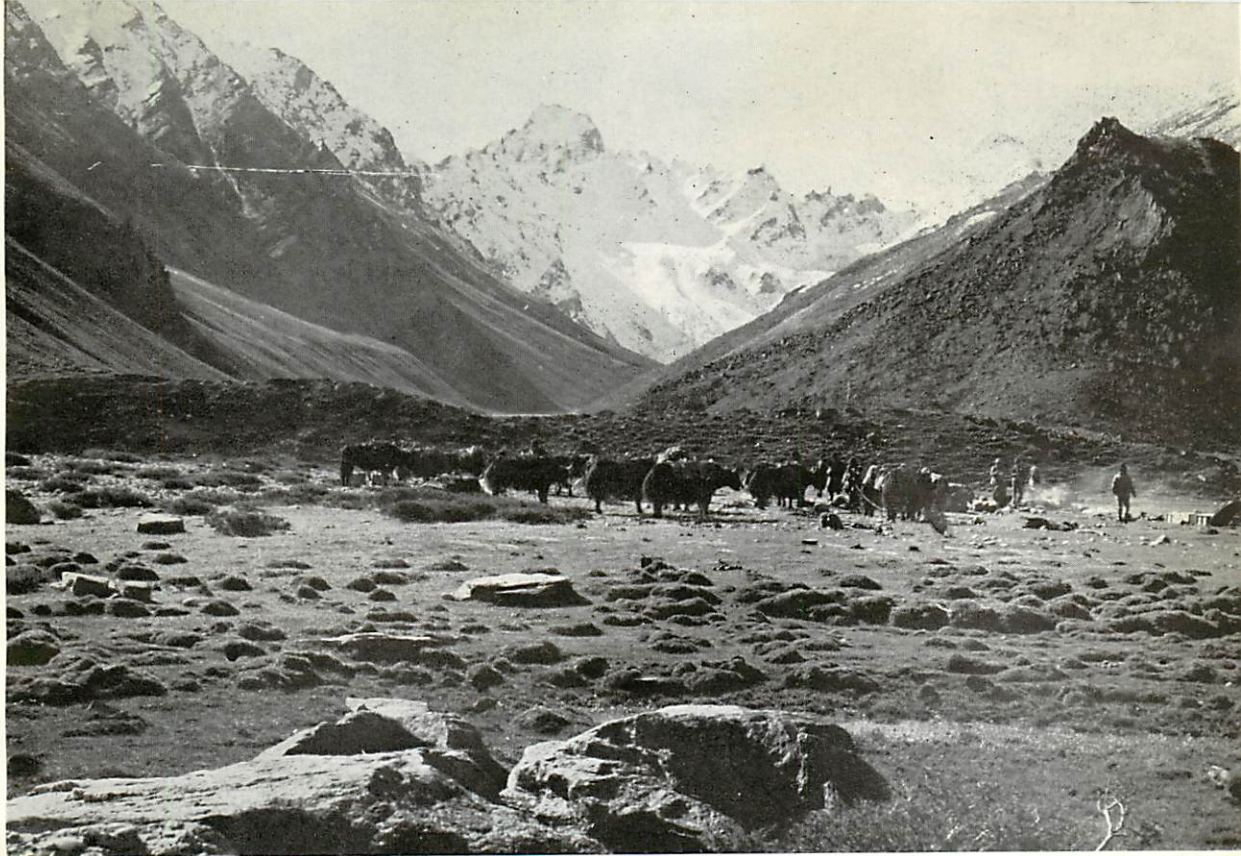
チベットの老人に魔除けをして  
もらう隊員



チベットはもう近くなった。  
チベットとネパールの国境をなすタクヒマールの山々

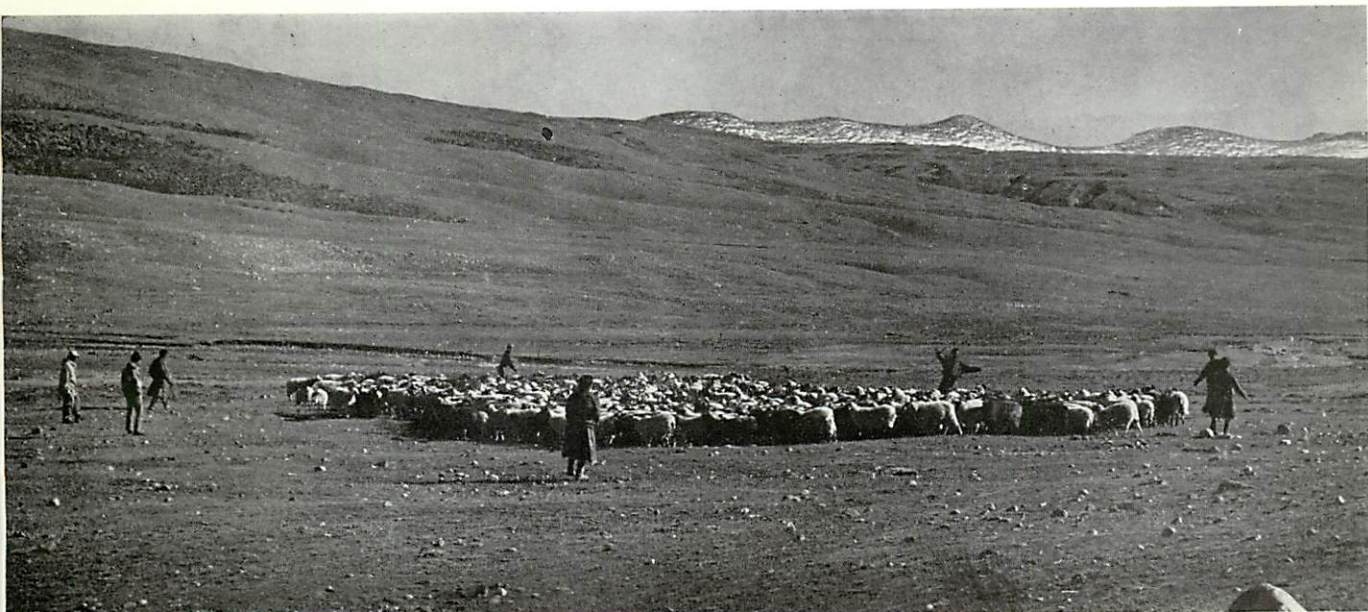


チベットに近ずくとポーター達もしだいにチベット人らしくなる。



チベットに入るとヤクが我々の伴をする

チベット高原にて



放牧されている羊の群

チベット人の青年が一人でこの羊の大群の番をしている



人とヒツジと高原と



タクブヒマール (6000 m前後の 山々)  
中央右の氷河がタクブ氷河の先端



ジコムラにて

隊員とシェバル

ネパール国境警備隊の兵士達 (後列)

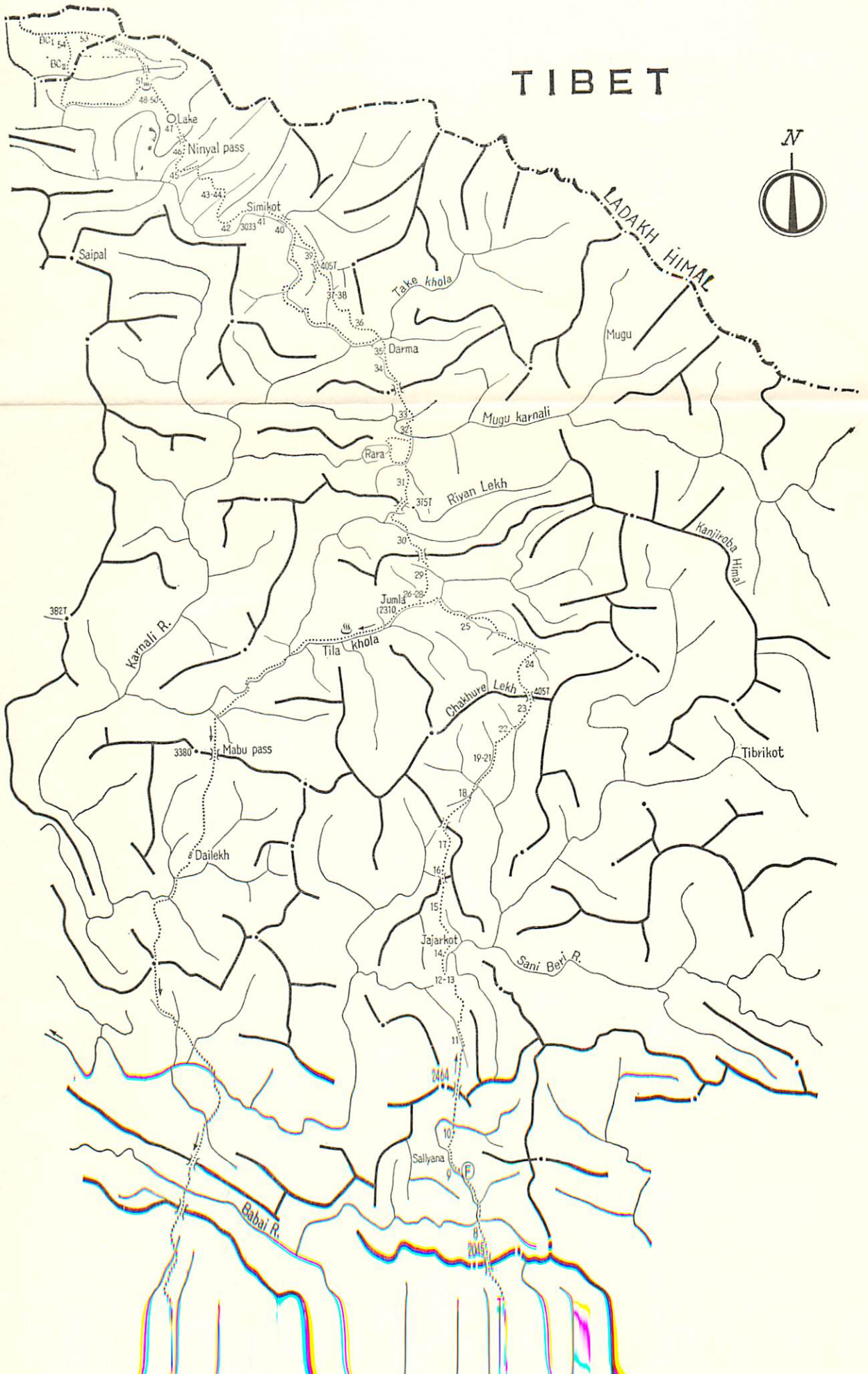
橋	渡	遠	宮	安	バ	小	リ	タ	ア
本	辺	藤	地	藤	サ	野	ン	ワ	ン
					ン	田	ジ	・	・
					シ		ン	シ	テ
					エ		・	エ	ン
					ル		シ	ル	パ
					バ		エ	バ	Ⅲ

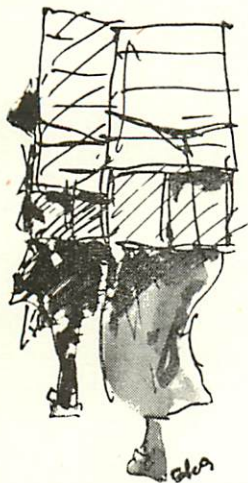


これがネパール・中国国境調査隊地図による  
ナラ・カンカール(約6500 m)



西ネパールカルナリ河流域概念図





---

1964 6. 30 印 刷

1964 7. 15 発 行

北海道大学西ネパール遠征隊報告

(頒 価 300 円)

発行者 北海道大学西ネパール遠征隊事務局

木 崎 甲 子 郎

札幌市北 8 西 5 北海道大学理学部地質学教室内

印刷所 文 栄 堂 印 刷 所

---